

平成 19 年度公立大学協会図書館協議会研修会

テーマ 「大学図書館と公共図書館 - 地域内連携の試み - 」

日時 平成 19 年 8 月 3 日 (金)

会場 公立大学法人名古屋市立大学 附属病院第一会議室

竹内氏のコメント・提言

とても優れた二つの事例をうかがいまして、私が何かコメントをすとか、提言をするというのは大変おこがましい気がするぐらいです。どちらの事例も大変優れている点、というか最大の特徴といえるのは、地域連携を支える基盤としての物流システムが非常にしっかりしていることで、大変印象的であると思います。私も、かつて静岡県の大学におりまして、地域の実情は見ておりましたので、地域の物流システム維持の難しさを非常によく分かっているつもりなのですが、これをきちんと支えていくという背景には、愛知県それから鳥取県どちらも、やはり県域全体に対してサービスを行うという、県立図書館の明確なビジョンがあるということを感じました。

もう一つ大きなポイントというのは、相互補完性ということではないかと思えます。つまり、首都圏などで大学図書館の一般公開というような議論をやったら必ず問題になるのは、ギブ・アンド・テイクにならないということなのです。どちらかが一方的にサービスをするというような形になってしまうケースがとても多いと思うのですけれども、それがそうはなっていないというのが、恐らくもう一つうまくいっている理由の一つではないかと思えます。非常に狭いところで見ると、ひょっとすると大学がやはり一方的にサービスを受けているとか、あるいは公共図書館の方が一方的にサービスを受けているというシチュエーションがあるのかもしれませんが、ある程度広い県全体であるとか、あるいはもうちょっと広い地域という形で見ると、かなりうまく相互補完性というのが成り立っている。そして、お互いやっていてメリットがあるということをきちんと確認ができるというところに意味がある、あるいはうまくいっている背景があるのだらうと思えます。

もう一つ大きい要因としては、特に鳥取県の場合、今ご報告の中であったところで言いますと、岡本さんの午前中の報告にもありました「関係性の構築」ということが非常にうまくいっていることがあり、また、それが直接的な利用者サービスの向上につながっているという点をやはり特筆すべきなのではないだらうかと思えます。人と人とのつながりの

形成というのが、今日、私も申し上げましたように、インタラクティブな関係の構築につながっていくのですが、図書館が一つの接点になって、例えば医学部の先生などが、一般市民ともつながっている訳です。一般市民とのつながりというのは、今日の大学にとっては当然強く求められていることですから、その接点づくりを言ってみれば図書館がやっているというところに、これまでの図書館サービスという枠を超えた関係性の構築という大きな意義を見いだすことができるだろうと思います。

そういったことの積み重ねが、何を生み出すかということになるのだろうと思うのですが、あんなに「図書館が好き」とおっしゃる、恐らく知事の中でも特異な方だと思われる片山知事の期待にちゃんとお応えになった鳥取県の図書館界というのは、やはり非常に立派だと私は思っておりまして、それによって、公共図書館だけではなくて、大学図書館も含めて図書館のイメージというのは恐らく鳥取県では素晴らしくいいのではないかと思います。

先ほど、私の話の中で、大学図書館というのはイメージだけで語るのは無理で、図書館がちゃんと大学のミッションに沿った機能を果たしているかどうかというのがトップに立つ大学の学長であるとか副学長というような人たちの大学図書館評価のポイントになっているというお話をしましたけれども、しかしながら、公共図書館のおかれている状況を考えると、図書館の持つイメージの良さというのをアピールすることは非常に重要であると思います。それが単に公共図書館だけではなくて、大学図書館も巻き込んでやっているということの意義深さというものを非常に強く感じております。

先ほども申し上げましたけれども、愛知県のおやりになっていることも、それから鳥取県のおやりになっていることも、やはり非常に強いビジョンに支えられているのは間違いないことであって、もう一つのポイントは、そのビジョンをどのように実際に移していくかということにおいて、図書館の方々が非常に熱心に働かれたことも推測できます。

ただ、サステナビリティという問題が、どちらの場合にも非常に解決の難しいものとしてあるのではないかと思います。お昼の休憩時の雑談でも話していたのですが、コスト負担の問題というのはどうしても避けて通れない問題だろうと思います。県立図書館が全域サービスということの一つの理由付けにして、全县レベルでの物流システムを支えていく。あるいは市立図書館が市民全体に対するサービスを支えるということをして理由にして、市全体の物流システムを支えていくという中で、果たして本当に大学図書館が、長期的に見て、物流システムのコストをカバーしなくていいのだろうか。場合によっては、大学図

書館の側が非常に多くのサービスを受けているという側面も見えてくるわけですから、そこをどのように考えていくかというのが一つの大きな課題になってきます。

もう一つ、私がやはり気になる場所としては、結局のところは、大学図書館が公共図書館から借りている資料というのは、大学図書館の蔵書構築方針に合わない資料であるということです。これをどう考えるかという問題が実はあると思います。つまり、自分の大学では、この本は買わない、こういう本は自分の大学の蔵書構築方針に合わない、しかし学生は必要だと言うから、公共図書館からどんどん借りるということなのですが、今のところは公共図書館の方が大学の学生さんも県民であるというような感覚で、全域サービスの枠の中で理解を示してくださっていますし、それがまさに相互補完性ということではあるのです。しかしこれが公共図書館同士だったら、かなり大きな問題になるだろうと思います。つまり「何であんたのところの市は、自分のところの蔵書構築方針に合わないからといって、この本を買わずに、よその図書館から借りるんだよ。うちから借りる費用、うちが負担しているんだよ」というようなことになるかもしれない。

この辺りを地域連携という枠の中で、いや、それはそういうものだとして理解して、相互にメリットがあるということ、大学側が公共図書館に対するサービスを強化する形で公共図書館の方をきちんと説明できるというか説得するというような枠組みをつくっていくのか、それとも大学図書館自身がやはり蔵書構築方針をある程度見直さざるを得ないのかという議論というのは、長期的には出てくるのではないのだろうかと感じています。例えば、公共図書館から同じ本を5回、6回というふうに大学がリクエストして借りるということがあった場合に、やはりこれは非常に大きな議論になるだろうと思うのです。

そのようなときに、問題をどのように解決していくか。恐らく鳥取県のように、人的交流が非常に進んでいけば、その辺はざっくばらんに話をして、いい解決方法が見いだしていけるのではないかなと思いますので、あまり悲観はしておりません。このように優れたモデルケース二つだと思うのですけれども、いろいろなところでこういった形での議論と連携が進んでいけば、非常に素晴らしいのではないかと思います。